

同志社大学

2010年度 卒業論文

論題：

葬制の変容からみる地域社会
～鳥取県大山町を事例として～

社会学部社会学科

学籍番号： 19071098

氏 名：山口 拡志

指導教員：立木 茂雄

(本文の総字数：20,894 字)

卒業論文の要約

山田慎也（2007）が和歌山県古座区のフィールドワークで明らかにした「地方の地域共同体は都市化の影響をそのまま受け取り均質的に葬制を変化させているのではなく、地域独自の論理により葬制を変化させている」という説を改めて検証する。具体的な調査の内容としては、筆者の出身地である鳥取県大山町を調査対象地として設定し、地域住民と地元の葬祭業者にインタビューを行った。インタビューの主な内容は、葬制文化が伝統的な形式からどのように現在の形式に変容したかということと、葬制の変容をどのように考えているかという2点である。調査の結果、同じ町内でも地域によって伝統的な葬制が維持されている地域と、消滅しつつある地域が存在することが明らかになった。また地域による会館葬と自宅葬の比率の違いから、地域の葬祭業者の独自の論理も葬制の変化を多様なものに行っている要因であるということがわかった。このことから山田の説は現在でも有効であることを証明した。

[キーワード] 葬儀、葬制、葬祭業者、葬式組

目次

はじめに.....	1
第1章 先行研究	1
1,1 葬儀とは	
1,2 葬制文化研究の歴史	
1,3 地方の葬制研究	
1,4 研究テーマ	
第2章 調査概要.....	3
2,1 調査対象地	
2,2 調査方法	
第3章 調査内容.....	5
3,1 伝統的な葬制文化	
3,2 現在の葬義の様子	
3,3 葬儀の主体	
3,4 葬儀の場所	
3,5 葬儀の変容の要因	
3,6 葬儀の変容に対する捉え方	
3,7 小括	
第4章 近隣地域の葬制.....	11
4,1 上坪部落について	
4,2 伝統的な葬儀	
4,3 葬儀は自分たちでやる	
4,4 地域が関わらない葬儀について	
4,5 小括	
第5章 地域の葬祭業者.....	13
5,1 三井葬祭について	
5,2 どのように地域に浸透していったか	
5,3 葬祭業者からみた葬儀の変容	
5,4 小括	
第6章 考察.....	15
おわりに.....	16

はじめに

近年、葬式は何かと話題に上がる。書籍では島田裕己の『葬式は、要らない』（島田裕己 2010）は日本の葬儀が高額であることに疑問を呈し、30 万部を超えるベストセラーになっている。映画では「おくりびと」（滝田洋二郎監督 2008）が第 81 回アカデミー賞外国語映画賞を受賞し、それに伴い「納棺師」という仕事がメディアで大きく取り上げられた。また葬式業界では新規参入が相次ぎ、2009 年には流通大手のイオンも葬儀ビジネスに参入し、低価格に抑えた葬儀サービスを提供している。一方で同社がサービスの一部として布施価格の明示化を行ったところ、全日本仏教会が布施は宗教行為だとし、宗教介入に当たると反発する騒動も起きた。このように現在葬儀に関する話題は事欠くことがない。

また葬式の形式も急速に変化しており、島田裕己はその象徴的な例が直葬であると述べている。直葬とは故人が亡くなった後、いったん自宅に遺体を安置し、近親者だけで通夜を行うものの、その後、遺体を直接火葬場に運び、やはり近親者だけで見送って、それで終わりにするやり方である。寺や葬祭場で最初の夜に通夜を営んで会葬者を呼び、翌日にも会葬者を呼んで葬儀、告別式を営み、それから火葬する一般的な葬式に比べて、かなりシンプルな形式であり、近親者以外の会葬者を呼ばない点では、密葬、家族葬の一番簡略化されたものである（島田 2010）。

そもそもこのいわゆる〈葬式ブーム〉の発端は葬式の件数そのものが増えたことがその大きな要因の一つであろう。実際に日本の年間死亡者数は 1989 年の 78 万 8,594 人から 2009 年は 114 万 4,000 人となり、その数は 20 年間で 30 万人以上に増えた。（厚生労働省人口動態統計 2010 年）単純に考えると 20 年前と比べると葬式の件数は 30 万件増えたのである。人々が葬式を体験する機会も増え、葬式と無縁であることが難しい時代になってきつつある。

そこで今回地方の葬儀に焦点を当て、地方独自の葬儀の現状を明らかにする。本研究の構成は、まず第 1 章で葬制文化の先行研究と具体的な研究テーマを明示し、第 2 章で主たる調査地の概要を紹介、第 3 章で調査内容を記述する。また第 4 章では別の調査地の概要とその調査内容に触れ、第 5 章では地域の葬祭業者に関する調査内容を記述する。最後に第 6 章で全体の調査結果の分析を行う。

第 1 章 先行研究

1.1 葬儀とは

そもそも葬儀とは一体何なのか。「葬儀とは葬送儀礼の略語であり、葬制とはひとの死をめぐる儀礼や諸風俗の総称として用いる」（内堀基光 1987）とあるように、まず葬儀とは儀礼の一種である。では日本の一般的な葬儀とはどのようなものなのか。『精選日本民俗辞典』によると、

葬儀は、死亡の確認から納棺まで、葬儀の式から埋葬（火葬）まで、埋葬（火葬）から忌明けから弔い上げまで、の 4 段階に区切ってとらえることができる。死亡の確

認から納棺までの間には、臨終の際の末期の水、急いで別火で炊く枕飯もしくは枕団子、死者を西向き北枕に寝かせる枕直しなどの儀礼がある。蒲団の上には魔除けの刃物をおき、枕元には枕飯を供える。近隣の家から手伝い人たちが集まり葬儀の準備をする。男は葬具作りや墓穴掘り、女は台所の賄い仕事などを分担する。通夜には家族は文字通り死者のそばで徹夜するか、また死者のそばで寝るという例が多い。その間ずっと線香や蠟燭の火は絶やさない。納棺に先立ち、身内の者たちによる湯灌が行われ、白い装束を着せる。この間の儀礼では死体の保全と死者の靈魂の鎮めと魔除けが中心となっている。次に葬儀の式から埋葬（火葬）までの間には、僧侶による読経、引導渡し、参列者の焼香などが行われ出棺となる。葬列を組んで野辺送りが行われる。この読経、引導渡し、焼香が家で行われる場合とその他に庭や墓で行われる場合とがあり、それらを内葬礼、庭葬礼、墓葬礼などと呼んでいる。埋葬(火葬)では穴掘り当番の人たちが埋めてくれる前に必ず近親者が最初に土を一握りかける（火をつける）という例が多い。次に、埋葬(火葬)から忌明けまで、さらに忌明けから弔あげまでの儀礼についてみると、墓直し、寺送り、初七日、四十九日など、死者の靈魂の鎮送の徹底のための儀礼、そしてその後は、年忌供養、弔い上げなど、死者の靈魂との交流のための儀礼が中心となっている。(福田ほか 2006 : 315-316)

以上が一般的な葬儀の形式だが、後述の先行研究により明らかになっているように最近では病院での死亡の増加、火葬の普及、葬儀社の進出などの要因がもとでその形式に大きな変化が生じている。

1.2 葬制文化研究の歴史

次に葬制文化の研究がどのようにして今日に至るかを述べたい。山田慎也(2007)によると、日本の葬制文化に関する研究は近代に民俗学が成立し展開していく中で常に重要な地位を占めてきた。日本の葬制は、柳田国男をはじめとする多くの民俗学者によって固有信仰としての祖先祭祀のなかに位置づけられたことにより、葬制は死者が祖霊になるための過程として捉えられていった。その祖先祭祀研究は日本の家構造とも関連が深いため、民俗学だけではなく農村社会学や宗教学、文化人類学においても注目されてきた。高度経済成長期になると、第一次産業から急速に第二次、第三次産業へ生業が転換し、また労働力の移動によって、地方の村落社会では過疎化が生じ、都市では核家族が増えることで、祖先祭祀の変容はさらに注目されるようになっていった。近代から現代までの祖先祭祀の担い手の変容や都市における新宗教と祖先祭祀の関係など、社会学や人類学、宗教学など多数の研究が登場してきた。一方で民俗学では伝統的な葬送儀礼が問題の関心となるため変容については民俗調査の対象とされなかった。よって葬制の変容についての研究は隣接する分野から本格的に始まったという(山田 2007)。

1.3 地方の葬制研究

ここで地方の葬制文化の変容についての研究の具体例を挙げると、福澤庄司は長野県松本市を調査し、葬儀の担い手が近隣互助組織である隣組から、専門業者である葬儀社へ変化しており、大都市ではすでに一般的な葬儀形態が各地方でも急速に進行しつつあること

を指摘した（福澤庄司 2002）。武田正は伝統的な葬儀が変容した象徴として土葬から火葬への転換を挙げ、さらに葬儀社が介入することで葬儀の場所も自宅、公民館、寺からセレモニーホールへと移り変わると山形県米沢地方を中心とした調査で明らかにした（武田正 2002）。また嶋根克己は、東京におけるある家の葬儀を事例にあげながら、東京における葬儀の方式や関係者の関わり方の変化を指摘した。それは葬儀が地域共同体による協力、実施から脱出し、家族のものとなり、さらには個人のものとなりつつあるというもので、死が個人化している状況であるという（嶋根克己 2001）。

一方でこれらの地方の葬制研究に対して山田は別の見解を述べている。山田によると、村落社会における葬制の変容は近代化に伴う地域共同体の解体と個人化という一元的な伝播論に陥りがちであり、葬儀の変容を扱っている宗教学、社会学などでは都市化を分析の前提としており、葬儀の変容を地域社会の崩壊といった社会構造の変化に一元的に結び付け、日本全国が一樣に変化していくが如き前提に立っている。そこではその過程にいたる要因やその意味はほとんど問われることはなく、ただ最終地点としての都市化された葬儀があるという立場である。しかし和歌山県古座区での葬制文化に関するフィールドワークを行ったところ、そこでの葬儀の変容には、地域内の〈葬儀に詳しい人〉とされる知識人が積極的に関与し、新たな儀礼の様式を導入する必要があまり感じられないように思われる場合でも、それを取り入れており、その結果、通夜の簡略化、葬式の式場の変化、葬式後の供養の繰り上げなどが進み、周辺地区の中でも最も葬儀が変化、簡略化された地区となっていることがわかった。その変化は都市化による社会変化とはい言にくく、古座区という地域社会が依然として大きな力を持っており、葬儀においても自律的に機能しているがゆえの変化である。つまり地域社会が主体的に儀礼を変化させている。よって地域社会はそれぞれさまざまな社会的、文化的背景を持っており、葬制の変容もそれらの背景の影響を多分に受けている。そして葬制の変容は一般に理解されている社会構造の変化よりもむしろ地域の論理によって変化しており、一元的な変化ではなく、地域のあり方について問う必要があるという（山田 2007）。

1.4 研究テーマ

「地方の地域共同体が都市化の影響をそのまま受け取り均質的に葬制を変化させているのではなく、地域独自の論理により葬制を変化させている」という山田の調査結果が現在でも有効であるか否かを改めて検証したい。特に山田がフィールドワークを行ったのが 90 年代後半であるのに対し、筆者は 2010 年の最新の調査を行う。また調査対象地を鳥取県西伯郡大山町にすることにより、新領域における地域独自の論理、近代化の影響を発見できると考えている。

第 2 章 調査概要

2.1 調査対象地

(1) 鳥取県大山町

鳥取県西伯郡大山町は鳥取県西部に位置する人口 1 万 8,183 人の町である。北部は日本

海に面し、南部は中国地方最高峰の大山（1,709メートル）がそびえる起伏に富んだ地である。主な産業は農業・畜産・漁業・観光業である。農産物では紅茶やブロッコリー、水産物ではサザエ、板わかめなどが特産である。観光業では国立公園大山の大自然をメインに、スキーや登山などアウトドアレジャーの地として県内外から観光客を集めている。また県西部の中心都市米子市の東隣りに位置するため、そこへ通勤、通学する人々も多い。近年無料バイパスが整備され大山町から米子市までは車で20分少々で行けるようになった。大山町は2005年に旧大山町と隣接する名和町、中山町の3町が合併し現在の大山町となっている。

(2) 下木料部落

今回特に中心的に調査した地域は筆者の育った地でもある旧名和町の光徳地区下木料部落である。この部落は旧中山町との町境に位置し、日本海の沿岸を東西に沿った海辺の集落である。浜辺は公式な海水浴場ではないが、砂浜であるために夏になると海水浴客が多く訪れる。また集落の西端と東端の防波堤が途切れた海岸はサーフィンの好スポットとして知られ、波の高い日は多くのサーファーが集まる。戸数は37で、住民の多くは高齢者が占めている。

部落の運営は区長（1年交代）を首長とし、部落内の除草作業、海岸清掃を年に数回行う。また部落の中心にある「みろくさん」と呼ばれる弥勒菩薩像を据えた御堂の掃除が年に一回行われ、その祭りも小規模ながら現在も夏に行われている。過去には子どもを持つ親が中心となって隣の上木料部落と合同で「木料こども祭り」という夏祭りを行っていた。部落内を子どもが神輿をかついで練り歩き、道端からお年寄りが声援を送るといった地域全体が盛り上がるイベントであったが、子どもの減少に従い10年前を境に行われていない。実際に光徳地区内にあった小学校も近年廃校となり、現在部落内の数人の小学生は旧名和町の中央にある小学校へバスで通学している。

葬式の際には部落内の葬式組が主体となって葬式を行った（近年その形態に変化あり、後述）。1組から4組まで部落内は4つに分けられており、葬式の際には遺族の所属する組と、隣の組との二組で葬式を取り仕切った。この二組の組内の家からは男女一人ずつ、勤めている人も休みをとって参加した。部落内の多くの家は近隣の倉谷部落にある曹洞宗法恩寺の檀家であり、葬式、法事の際はそこから住職を招く。その他にも神道、日蓮宗を信仰する家も存在する。鳥取県西部は古くから両墓制の地域であるため墓地は2か所存在する。そのひとつの遺体を埋めるステバカ（ウメバカ）は日本海を背に急こう配の坂を上った部落のはずれにあり、もうひとつのアゲバカ（マツリバカ）は墓石を据えたいわゆる一般的な墓で、海岸沿いの住宅密集地のすぐそばにある。

2.2 調査方法

具体的な調査方法としては地域の住民にインタビューを行い、地域の葬制文化について、その変容過程、その変容に対する捉え方などについて語ってもらった。インタビュー時間はそれぞれ1時間程度である。また多角的な視点を取り入れるため、地元の葬儀社の社長にも同じようにインタビューを行った。

調査にあたって分析の軸となる項目を抽出した。一つは地域の〈伝統的な葬制文化〉と

〈現在の葬式の様子〉についてである。まず地域の古くからの葬制文化を住民の口述と郷土の民俗資料を頼りに記述する。そして現在の葬式の様子も同様に記述し、伝統的な形式と現在の形式とを比較し、どのように葬儀の形態が変化していったかを明らかにする。このとき〈葬儀の主体〉と〈葬儀の場所〉に焦点を当て、その変容の様子を詳しく見ていきたい。もう一つの項目は〈葬儀の変容に対する捉え方〉である。葬儀の変容が地域住民にとってどのように映っているのかを明らかにし、葬儀の近代化の流れが地域住民の意識にも影響を与えているかを探る。今回下木料部落の住民の方に7人にインタビューを行った(表1参照)。以後文末にアルファベットが出ることもあるが、この場合その文の内容はその人の口述である。

表1 インフォーマントのプロフィール

	性別	年齢	職業	取材日時
Aさん	男	79	無職	2010/11/28
Bさん	男	66	農業	2010/11/27
Cさん	女	64	農業	2010/11/27
Dさん	男	78	無職	2010/11/28
Eさん	女	76	無職	2010/11/28
Fさん	男	57	施設職員	2010/11/7
Gさん	女	85	無職	2010/11/5

第3章 調査内容

3.1 伝統的な葬制文化

(1) 葬制文化一般

川上延彦によると、伯耆地方各地の葬の習俗については、ほとんど同じである(川上延彦 2009)。また下木料部落の習俗を詳細に記した文献もないため、隣の旧中山町地区の町史である『新修中山町誌』と下木料部落の住民の口述を元に地域の葬制文化を記述していきたい。

先に引用した精選民俗辞典の4段階をこの地域の葬制文化に当てはめてみる。まず死亡の確認から納棺までの間では、遺体に末後の水を含ませ、仏壇の前に北枕にして寝かせる。顔に白布をかけ、布団の上に魔よけとして脇差しや鎌などの刃物を置く。そして香炉で一本線香を焚き、そのほかにも団子、飯、味噌、塩などを供えるがその組み合わせは部落によって異なる。死亡した夜に近親者が集まり通夜が行われる。下木料部落では葬式組は当家の家もしくは伍長(組の責任者)の家に集まり葬儀の段取りや役目の分担を決める(福田豊平)。葬式の段取りは葬式組に一切まかせるならわしだった(Aさん)。そして葬式の日の朝に湯灌、納棺を行う。葬式はだいたい午後から夕方にかけて行われるのが普通であるが、酉の日は鳥が寝てから葬式をしなければならないといったことや、友引に葬式をしないのは各地共通である。

次に葬儀の式から埋葬までの間には、まず葬列を組み野辺送りが行われる。この葬列はドンチンジャライと呼ばれ、下木料部落でも組内だけではなく部落の人々全員が参加した。長いさらし木綿を列で引き、幟旗などの道具を持ち家からステバカまで歩いた。着くと入

り口近くにある台座を3周左回りに回り、そこに棺道具を置いた後僧侶による読経、引導渡し、参列者の焼香などが行われたという（Gさん）。埋葬する穴は部落の穴掘りの役目の人が掘った。

最後に埋葬から忌明けまで、さらに忌明けから弔あげまでの儀礼についてみると、葬式の翌日に近親者はステバカに行き線香や花を立て、墓直しを行う。そのため前日に葬列でステバカを訪れる際には部落の穴掘りの人に埋葬をまかせ、近親者はその途中で帰る（Aさん）。初七日、四十九日など、そしてその後は、年忌供養を行う（中山町誌編集委員会2009）。

（2）葬式組

ここで葬式組の具体的な役目について説明する。まずソウ（左右、または葬）というものがあ、これは死亡報告を部落内や寺をはじめ遠く離れた親戚や知人に伝える役目のことである。行く先を葬家と相談して決めた上で、数名の男が二人一組になって出かけた。この際昼間でも提灯を下げていく（Dさん）。先にも触れた穴掘りの役目であるが、この役目は葬式ごとに順番で回ってきた。重労働かつ遺体と関わる仕事のため、この役目になると当家から清酒が一本ふるまわれたという（Bさん）。野道具づくりと呼ばれる役目もあり、色紙をつかって造花をつくるハナキリと呼ばれる作業や、竹を切った容器に藁を固く詰め込んでつくる花立て（ステバカに置く）の製作などを行った（Aさん）。このように葬式でつかう道具は自前で用意していた。受付は葬式の際に入り口で香典や記帳を管理する仕事である。この他にも寺迎えや届け出といった役目もある。寺迎えは使いとして2名の者が寺に行って葬式の時間などを正式に伝え、木魚や経典などの入った仏具の入った檀用箱やその他の道具を借りてくる役目のことである。届け出は役場に死亡届を提出しに行く役目で、このとき遺族から保険証などの身分証明書を預かる（Aさん）。

以上が部落の男が担う役目の例である。これらの役目は昔からなんとなくそれぞれの家で決まっているという（Fさん）。F家は昔から受付の担当が多い。また葬式の司会を担うこともあった。B家は野道具づくりの造花づくりが多く、人が足りないときは受付にも回ったという（Bさん）。

一方で女が担う役目は炊事である。まず当家と相談しおおまかな人数を把握する。そして葬式の当日は各家から野菜などの材料を持ち寄り、足りない材料は買ってきて精進料理をつくる。汁のダシも鰯ではなく昆布で取る。現在は昼と夜の二食を作ることが一応決まっている（Cさん）。

3.2 現在の葬義の様子

（1）土葬から火葬へ

まず埋葬方法が土葬から火葬へと変わった。近隣の旧中山町地区ではその移行は1986年前後で、火葬が一般的になったのは2001年以降だという。（中山町誌編集委員会2009）下木料部落でも同様の変化が起きた。その例としてFさんによると、F家では17年前に身内の者が亡くなった際はステバカに遺体を土葬したが、10年前にFさんの父が亡くなったときは火葬にして遺骨だけステバカに埋葬したという。また5、6年前にはステバカにある遺骨を掘り返して、その遺骨をアゲバカに移し墓を一元化した。他の家がこの移行

を行った際についでに F 家もしてもらったという。ステバカは急こう配の坂を上ったところにあるが、もう坂を上がるのが困難になってきたため、墓参りが楽になってよかったと F さんの母は言っているという。それ以前はお盆や法事の際はステバカとアゲバカの両方を墓参していたが、移行して以降近くにあるアゲバカのみを訪れるだけでよかった。ステバカは遺体を埋めたところを土で盛って山にし、その上にメアテ石と呼ばれる石や花立てを置くが、現在 E 家のステバカがあったところは全くの平な草地となっている。今後ステバカに埋葬することはもうないという。一方で B 家では火葬の葬式を未だに経験していない。これは長らく身内に不幸が起きなかったことが要因であるが、今後そういうことがあったら土葬ではなく火葬で行うだろうという (B さん)。

この影響で葬列を組む野辺送りもなくなった。現在では遺体を火葬場に送る出棺の時刻に部落の人々が集まり、遺体を乗せた霊柩車を見送るだけになった。

(2) 葬式組の変化

葬式組の存在も次第に薄くなってきつつある。まずソウの役目は消滅した。これは電話や自動車が普及したことが要因の一つである。このために届け出や寺迎いの役目もなくなった。しかしソウがなくなった原因としては部落内に放送設備を設置したことも大きいという (D さん)。これは部落の公民館に設置したマイクから各家に設置されたスピーカーに音声が行く仕組みで、現在は葬式の連絡やその他の集会の連絡を伝えるために利用されている。この設備が設置されてしばらくはソウの役目はまだ残っており、直接近所を回って葬式の報告をしたというが、いつしか部落内放送で済みますようになった。このため部落の人同士が関わる機会が一つ減ったと E さんは言う。野道具づくりも葬列が消滅したことや葬儀社から道具を購入できるようになったことが原因で行われなくなった。また火葬が一般的になる中で穴掘りの役目も必要とされなくなり消滅した。葬式の際の司会も現在は葬祭業者が代わりにするようになりつつあるという (F さん)。

このため葬式に行っても男は仕事がないといった状態になった (D さん)。その結果、もともと亡くなった当家の所属する組とその隣の二組で葬儀を行う取り決めであったものが、男は一組だけが参加する取り決めに変わった (A さん)。

このようにほとんどの役目が消滅していく中で受付の役目は未だに残っており、式場が自宅でなく葬祭会館で行われる際にも部落の代表を派遣し、そこで受付を手伝うという。また出棺の見送りも部落の人々が集まり行っている。

女の役目である炊事は未だに残っており、昼と夜の二食料理を用意するという取り決めは変わっていない。一食にしようという案が出たこともあったが変わらずに現在に至る。しかし実際のところ料理を作るのは当家に頼まれたときであり、その上一食でいいと言われることが多い。そのため最近では二食つくことは稀である。また実際に二食を準備するとなると人手も多く必要で、その後の片付けも大変であるという。ちなみに夜も料理を用意するのは、当家の近親者は葬儀が終わって夕方から引き続き七日法事を拝むためである。このとき部落の人のぶんの料理も用意した。また昔は部落でつくるのが当たり前だったものの、現在は当家が葬祭業者に頼んで仕出し屋の料理で済ますことが増えている (C さん)。その料理の内容も精進料理に限ったものではなく、家によっては刺身をつけることもあるという (B さん)。

3.3 葬儀の主体

(1) 地域の葬儀

先の「葬式の段取りは葬式組に一切まかせるならわしだった」(Aさん)という口述からわかるように、昔は葬儀の主体は完全に〈地域〉だった。この葬式組というものも「役目は昔からなんとなくそれぞれの家で決まっている」(Fさん)という口述からもわかるように、特別な組織ではなく地縁組織の延長である。そのため組織としての明文化された規則や決まりはない。その例としてAさんによると、葬儀では組の伍長が葬儀委員長をやるのが地域の慣習だが、ある時隣家で不幸があった際、その当時Aさんは伍長でなかったにも関わらず隣家から葬儀委員長を頼まれ、その役目を引き受けたという。葬儀委員長の役目は下木料の場合、葬儀の際の電報読み・司会・香典受けを担う重要な役目である。またAさんはこのとき当家の人に対しては参列者に頭を下げとだけでいいと言ったという。このことから葬儀はその時その時で臨機応変な対応がありながらも、各家ではなく地域が主体となって執り行っていたことがうかがえる。

(2) 主体の変容

しかし葬式組の変化からもわかるように、下木料では葬儀を主体として担う存在は地域ではなくなりつつある。そして葬儀は各家と葬祭業者がそのやり方を主体的に決めるという流れになってきている。その象徴的な例として最近部落内である高齢のおばあさんが亡くなった際のその葬儀をめぐる様子が興味深い。そのおばあさんは下木料にずっと住んでいたからということで、その息子夫妻は部落の人でぜひ葬式をあげてほしいと明確に部落の人に頼んだという。一方そのおばあさんの別の娘二人は生活改革が必要であり、部落の人にお世話をかけたらいけないという理由で頑として反対したという。そして最終的にその葬儀は親族のみで行われ、ほとんどの仕事は葬祭業者が引き受け、部落の人は公人の受付だけを担当した。またある別の家で葬儀があった際も部落の人は受付だけ担当し、その他は出棺を見送るだけだったという。料理の準備も頼まれることはなかった。

3.4 葬儀の場所の変容

次に葬儀を場所という観点から見ていく。旧名和町地区では現在でも自宅葬が主流である。その要因の一つは昔ながらの一戸建ての家が多く、家の敷地も広いため参列者の収容や駐車場にも困ることはないというものだ。一方例外もあり、旧名和町の御来屋という他の地域では地域全体が古い長屋の密集地であり、各家の正面玄関も道路に面しているという事情から葬儀社の会館で葬儀を行うことも多いという。また三井葬祭（詳しくは後述）という葬祭業者が地域内にあることも大きな要因である。下木料では先に述べたように葬儀の主体は各家と葬祭業者になりつつあるが、葬儀を行う場所としてはいまだに自宅が主流である。葬儀社の会館で行われる例はまだ珍しい。よって葬儀の場所という点では変化がないように見えるが、葬儀の際の料理をつくる場所は昔と現在では大きく変化している。

昔は葬儀があると料理はその家の台所で調理していた。葬式の日になると組内の女性が各々食材を持ち寄り当家の台所に集まったのである。そしてそのまま部落の人たちも当家の近親者と出来上がった料理を頂いて一緒に弔ったという。そのため各家には葬儀の

ための多くの食器が用意されていた。実際に F 家の蔵にも現在でもそのための食器が多く残っているという (F さん)。

その後 20 数年前に部落内の要望のもと新しい公民館が建設された。このことをきっかけに葬儀のときは公民館で料理をつくって、食事でも部落の人と当家の近親者は公民館に集まって取るという取り決めが変わった (A さん、当時区長)。実際に 11 年前に F さんの父が亡くなったときも、F 家の親戚と部落の人が一緒になって公民館で食事をした (F さん)。この理由は部落内でも各家によって台所の大きさは様々であり、大がかりな炊事ができない場合もあったからである。現在でも公民館には大きな調理器具やたくさんの食器が置かれている。

そして最近ではすでに述べたように葬儀の際の料理は作ることがあっても一食であり、多くは葬祭業者に頼んで仕出し料理を取るようになりつつある。よって自宅で近親者は食事を取り、部落の人と当家の近親者が公民館に集まり食事をするといったことは当たり前の光景ではなくなりつつある。

3.5 葬儀の変容の要因

地域主体の葬儀が行われなくなりつつある要因を住民に聞くと、皆が勤めに出だしたことが大きいと言う。昔は多くの家が自営の専業農家で、葬儀のために仕事を休むことは難しいことではなかった。しかし田舎でも産業構造が変わり、専業農家が減り勤めに出る人が増えると従来のように休日を取るのに融通が効かなくなってくる。いまだに大山町では部落内の葬儀のために会社や仕事を休むことは一般的ではあるが、最近ではその状況も変わりつつある。実際に近隣の米子市には大手企業の支社または営業所が多く存在し、そこに勤める人も多いが、地域の葬式のために仕事を休むと言うと理解されないという (F さん)。企業の多くは都会の慣習をそのまま地方に持ち込み、支社長や所長も都会の本部から派遣されているからである。また世代間の意識の違いもある。葬式は部落でやるのが当たり前だとお年寄りが思う一方で、若い人はそれを煩わしいと思っているかもしれないと E さんは言う。昔は部落のお年寄りが外から嫁いできた女性を気にかけて世話をした。実際に E さん自身も 50 年程前に他県から嫁いできたが、姑に限らず部落の年配の女性がいろいろと気にかけてくれたという。しかし現在ではこのような地域のつながりは無いに等しい。さらに地域の高齢化も大きな要因である。地域の一員として葬儀を手伝いたいけど身体が弱って役に立たないと嘆くお年寄りも多い。実際にインタビューをした A さん、E さん、G さんは葬儀とは長らく関わっていない。その他にも地域主体の葬儀がなくなりつつある理由として皆が一様に裕福になったからという声もあった。昔はどの家も貧しく部落の世話にならなければ葬儀ができなかったという (D さん)。しかし今はどの家も葬祭業者に頼めばそれなりの葬儀ができるようになった。

3.6 葬儀の変容に対する捉え方

ここまで見てきたように下木料の葬儀は地域主体のものから各家主体のものへと変容しつつある。ではこの変容を住民はどのように捉えているだろうか。

(1) 地域で弔う

今回のインタビューで、今の葬儀の現状を時代の流れと受け止めながらも、地域全体で故人を見送りたいという声が多く聞かれた。たしかに部落総動員で葬儀をお世話するといったことは少なくなっているが、全くなくなっているわけではない。当家の人に頼まれたら協力する態勢はある」とCさんは言う。少々気をつかうところもあるが、今のところお世話してあげようという気持ちはみんな持っているのではないかと考えている。それが料理をつくり、葬儀を手伝うといった形ではなくとも出棺のときくらいは見送りたいという気持ちはあるという。同じように「この野郎と思う奴でも送ってあげようと思う」とBさんも言う。このように部落の人を見送ってあげたいと思う根底には祖父や祖母の葬儀のときにお世話になっているという強い思いもあるという。よって部落の人に葬儀を頼もうという雰囲気も残っているという。

(2) 地域が関わらない葬儀について

密葬（家族葬）のような近親者のみで行い、地域が関わらない葬儀についてはどのように考えているのだろうか。「部落の絆が薄れるからよくない」とFさんは言う。地域で行う葬儀は地域の絆を強め、維持する効果があるという。昔は地域全体で行う行事はたくさんあったが、現在ではそれも葬式くらいのもになってしまった。地域の絆を維持する最後の砦がなくなるとまずいと考えている。Aさんも世代が代わるとどうなるかわからないとしながらも、葬式は部落のコミュニケーションだと言う。同じようにGさんも葬式は一つのレクリエーションだとし、大変だったが皆楽しんでやっていたと語る。またBさんも地域が関わらない葬儀について、「そういう葬式は農村地帯の部落には馴染まない。助け合っていないといけない」と述べている。それと同時にテレビで都会の葬式の様子を見てびっくりしたということも話している。その番組の内容はマンションで亡くなった人が出棺されるときに、マンション内の住人総出で見送ったところ遺族の人が感激したというものだったらしい。たしかに下木料では珍しい光景ではない。またCさんも「しんどいけど部落で料理をつくって弔うことはあってもいい」と述べており、地域主体の葬儀がなくなりつつあることはさみしいという。

(3) 今後の葬儀について

一方で地域の葬儀のありかたを変えるなら変えるできちんと話し合うことが必要ではないかという声もある（Eさん）。部落内の話し合いの場として、毎年12月末に部落内で寄り合い（収支決算報告のため）があるが、そのときに葬式について話し合うことは難しいという。時期が年末で忙しいし、めでたい雰囲気があるためである。また家にお年寄りがいる場合そういう話はしにくいという事情もあるという（Cさん）。Eさんは今後自分にもしものときがあった場合、どのように部落の人のお世話になればいいか不安であるという。一方、Aさんは自分が死んでからのことは家族にまかせるとし、比較的気にしていないようである。よって様々な意見があるが、このことは部落内、また家族内で今後の葬儀をどのように行うかといった意見交換が十分に行われていないことをうかがわせる。

3.7 小括

下木料部落の葬儀の様子は着実に変容している。古くからの儀礼は近代化により合理化され消滅し、葬儀の主体も地域から各家へ移り変わりつつある。この結果は先に述べた山田慎也の調査結果とは異なる。古座区の場合葬制の変容は地域共同体が主体的に選択し、受け入れたものであるが、下木料の場合葬制の変容は外部の影響を受動的に受け入れていた結果である。しかし住民の意識はというと、地域で吊ってあげたいという意識がいまだに強く残っている。この意識は古くからの農村社会の色合いが残るもので、都市化された意識とは言い難い。よって下木料の場合、葬制は都市化の影響を受け変容しつつあるが、葬制に対する住民意識はその影響をあまり受けていないと言うことができる。

第4章 近隣地域の葬制

今回下木料部落の住民以外に、上坪部落のHさん（男性 57 才）、Iさん（男性 65 才）の2名にもインタビューを行った。二人とも部落内で何度も葬儀委員長を務めた経験がある。

4.1 上坪部落について

上坪部落は旧名和町の光徳地区にある地域である。国道9号線を南に並行に走る旧山陰道沿いにある地域で、下木料部落からは約2キロメートル離れた地にある。多くの家は近隣の下坪部落（下木料の西隣の海沿いの部落）にある曹洞宗龍法寺の檀家である。墓もステバカは下坪部落にあり、部落から離れた場所にある。部落内は1から8組までにわけられており、葬儀の際は亡くなった当家の所属する組とその隣の二組が主体となって取り仕切る。

4.2 伝統的な葬儀

上坪部落は古くからの葬儀形式が残っている地域である。その例をいくつか挙げると、まず葬列がいまだに行われている。それは霊柩車にさらし木綿のひもをつけて、当家の近親者と部落の人々で引っ張って部落の外に通じる道まで歩くというものである。下木料では消滅してしまった葬列が、上坪では霊柩車を引っ張るといった別の形になりつつも残っているのである。ちなみに部落の外に通じる道の前には空き地があるが、霊柩車の向きを変えるためだけのために常に駐車禁止となっている。葬式の料理もいまだに部落の女性の手によってつくられ、葬儀社に頼んで仕出し屋で済ますということはないという。また造花や飾り物をつくる野道具づくりもいまだに行われている（Hさん）。

また他の地域の葬儀と異なる点があり、上坪部落は昔から火葬の習慣があった。Hさんによると、このことは先にも触れたようにステバカが離れた場所にあることが要因であるという。土葬するとなると、遺体のかついでステバカのある離れた場所まで持って行かなくてはならない。しかしそれは大変だからということで火葬にして、形式だけ土葬のように葬列を行っていた。この火葬の習慣はHさんが幼いころからあったという。つまり少なくとも40年以上前から上坪では火葬による葬儀があったことになる。

4.3 葬儀は自分たちでやる

「葬儀は地域で行うもの」といった昔はどここの部落でも当たり前だった意識を H さんと I さんはいまでも強く持っている。上坪では葬儀の報告はまず葬儀委員長に伝えられる。この葬儀委員長は何年も I さんが務めている。葬儀委員長の選定には明確な決まりはなく、あいつにまかせればなんとかなるといった者が頼まれるという。H さんは I さんの都合が悪いときにこの役目を代わりに引き受けることが多い。そして組内の人々が集まり葬儀の段取りを決める。この集まりには当家の者は参加できなかった。今では当家の者も参加できるが、そのスタンスは昔と変わらず葬儀は葬式組にまかせるといったものである。またこの集まりには葬祭業者も出席するという。しかしあくまでも葬儀は部落のしきたりに沿って行われるため、葬祭業者も部落の者の指示を仰ぐのみである。万が一葬祭業者が先走って葬儀を進めてしまうと、その葬祭業者は出入り禁止になるだろうと H さんは言う。その根底には「葬式は外のものにはさせられん」という意識がある。このため組内の人も必ず仕事を休んで葬儀を手伝う。H さん自身の経験からもこの意識はうかがえる。H さんが以前区長だったときに 3 件隣の家で葬式があった。その対応に追われている三日後に H さん自身の父も亡くなる。しかしどちらの葬式も部落で全て完遂したという。「大変でも自分たちでやるのが一番いいし、それが当たり前だ」と H さんは言う。

4.4 地域が関わらない葬儀について

地域が関わらない葬儀についてはどのように考えているか。H さんは今後上坪でも葬儀の形態がどうなっていくのかはわからないということを述べている。実際に上坪でも葬祭業者が全てを取り仕切った葬儀が行われた例もある。しかし葬儀のやり方は当家の自由と理解した上で、地域の古くからの葬制文化はなくしてはいけないとも言っている。それ以前にこのように古くからの葬儀を行うことは当たり前のことをやっているにすぎないとの考えが強い。また変えようという声もないという。

I さんも現在の葬儀形態がいいかどうかはわからないとし、また封建的な側面もあると認めている。しかしこの葬制文化を後世に残していきたいと語っている。I さん自身は元々上坪の出身ではなく、40 年程前に移り住んできた。しかし葬儀の際は村のみんな仲間を見送ってあげたいという強い思いがあるという。

4.5 小括

上坪部落は伝統的な葬儀のやり方を現在でも行っている。葬列や野道具づくりはその例であり、これらは地方でも普及しつつある葬儀の近代化の流れに対して真っ向から反対しているといえる。現在葬儀は葬祭業者に頼めば簡単に済ませることができるが、上坪の人々はそれを選択せず、伝統的な形式を今なお続けている。このことは地域共同体が外部からの影響を一方的に受け取るのではなく、自律的に機能し主体的に葬儀の形式を選択している事例だといえるだろう。また土葬が一般的だった時代に火葬を行っていたということからも、この地域が昔から独自の論理で葬制の変容を選択していたことがわかる。よって住民の意識も必然的に都市化、近代化の影響をあまり受けていない。

第5章 地域の葬祭業者

葬儀を生業とする葬祭業者の視点から、地域の葬制を見ていく。山田の先行研究によると、古座区の葬祭業者は当初地域の人々による共同作業には影響を与えない花輪や蓮の造花など物品の提供からはじめ、その種類を増やす中で、地域の共同作業の領域に進出していった。そして古座区の人々が葬祭業者を利用することを主体的に選択し、慣習としたことで葬祭業者はさらに葬儀の知識を保持する役割を持つようになったという(山田 2007)。

では大山町の葬祭業者はどのように地域に浸透しているのか。またそれを明らかにすることにより、地域が独自の論理で葬制を変容させているということを別の視点から見ていきたい。

5.1 三井葬祭について

今回、地域に展開する葬祭業者として旧名和町地区御来屋にある三井葬祭の代表取締役・三井養一さん(57)にインタビューを行った。

三井さんは35歳のときに銀行を退職し、米子にある大手葬祭式場に再就職した。そこで10年間支配人を務めた後、その大手葬祭式場も家の事情で退職し、2003年に地元の大山町旧名和町地区で現在の三井葬祭を起業した。何か細々と食べていける仕事はないかと考え、自分のできることと地元で葬祭業者がないことに着目した結果の選択だったという。その後2006年には株式会社化し現在に至る。

5.2 どのように地域に浸透していったか

三井葬祭は2003年にできた会社で、その歴史は今年で7年と浅く、古くから地元にある葬祭業者というわけではない。それでは三井葬祭はどのように地域に営業展開していったのか。

(1) 地元の利

まず米子にある大手業者との差別化を図った。具体的には参列者が立ったままだった葬儀にパイプ椅子を持ち込むサービスを始めた。このサービスは遠方にある米子の大手業者は人件費がかさむためできないという。一方地元の三井葬祭は100台規模の椅子を貸し出すことができる。また玄関の入口が狭い家に対しては下駄箱を用意するといったことも始めた。このような小さな気配りは地元の葬祭業者だからこそ思いつき、実行できるという。

(2) 地域密着

また地域主体の葬儀にいかに溶け込むかも重要な点である。三井葬祭は葬儀があるとその地域の葬式組の集まりに自ら出向き、直接参加する。このことにより地域の人々との役目分担がスムーズに行われる。また葬儀の主体となる人とも直接話ができるため、葬儀の打ち合わせの手間が省けるという。このようなこともやはり米子の大手業者はできず、地元にある葬祭業者だからこそできるという。

(3) 奉仕の気持ち

葬祭業者は利益だけを考えると続かないという。開業当初から三井さんは利益だけを追求せずに奉仕を念頭に業務を行ってきた。そのため初めの3年間は利益が出ず、仕事もなかったため、大変だったと語る。しかしこのことを念頭にひとつひとつの葬儀を完璧に執り行うことで次第に依頼も増えていった。その要因は参列者からの口コミによるものであり、商売柄営業をすることができない葬祭業者にとっては最も重要な宣伝方法であるという。

三井葬祭ができるまで大山町全体の葬儀は米子の手業者か旧大山町地区にあるJA葬祭がそのシェアのほとんどを占めていたという。しかし現在では三井葬祭が旧名和町地区で8割、旧中山町地区で6割とそのシェアを逆転させることができた。一方旧大山町地区ではその地域内にあるJA葬祭がいまだに8割のシェアを持っているという。

5.3 葬祭業者からみた葬儀の変容

(1) 葬儀の変容の3段階

葬儀の変容は3段階あるという。一つめの段階は〈地域内の葬儀〉で、地域の住民によって行われ、その地域内で完結する葬儀のことである。農村社会の伝統的な葬儀がこれに当たる。二つめの段階は〈地域と葬祭業者の葬儀〉であり、地域に葬祭業者が出向いて地域の人々と葬儀を行う。三つめの段階は〈葬祭業者が全て行う葬儀〉である。この葬儀では地域の人々が関わることはなく、場所も葬祭業者の会館で行われる。セレモニーの葬儀とも言われ、大がかりな演出が盛り込まれる。最も都市化された葬儀の形式だと言える。

現在の大山町で一般的に行われている葬儀の形式は二つめの〈地域と葬祭業者の葬儀〉であるが、時代の流れは〈葬祭業者が全て行う葬儀〉に傾きつつあるという。

(2) 自宅葬と会館葬

下木料・上坪部落の葬儀の様子からもわかるように、現在旧名和町地区では自宅で葬儀を行う自宅葬の比率が高い。その割合は8割で、会館で行う会館葬はまだ2割程度だという。しかし隣の旧大山町地区では会館葬の割合が8割を超えているという。その要因は旧大山町地区でシェアを持つJA葬祭が葬祭ホールを持っており、葬儀の際も会館葬を勧めているからだと言います。しかしこれは時代の流れであり近隣の米子市では現在会館葬が一般的で、旧名和町地区でもその比率は2、3年の内に5割に増えると三井さんは考えている。三井葬祭も近年需要を見込んで「旅立ちホール」という葬祭ホールを建てた。しかし三井さん自身は自宅で葬儀をすることが故人にとって一番いいという考えを持っているため、いまだに依頼者にはまず自宅葬を勧めるという。このことは旧名和町地区がいまだに自宅葬の比率が高いことの一つの要因であると推測する。三井さんによると実際に当初会館葬を希望していた遺族が自宅葬に変更するという事例もあったという。葬祭業者の方針の違いは、地域の葬儀の形式に影響を与えるということがわかる。

(3) 受付の役目

三井さんから見ても地域主体の葬儀はなくなりつつあるという。葬列や野道具づくりを行う地域も現在では少ない。そして地域が担ってきた葬儀の役目を葬祭業者が引き受けるようになってきた。しかしその中で、葬祭業者ができない役目があるという。それは受付

である。受付は葬儀の際に記帳や香典を取り扱う役目のことだが、この役目は必ず地域の人か近親者にお願いするという。それは受付の役目は現金を取り扱うからであり、予めトラブルから距離を置くためである。先に下木料で葬祭業者が主体となった葬儀の例を挙げたが、このときも受付は部落の人が担当していることがわかる。また受付の役目を地域の人が担うという今の流れは、よっぽどのことがないかぎりなくなると三井さんは言う。受付の役目がなくなるということは地域の絆が完全になくなることに等しいという。

5.4 小括

地域の葬儀の変容にあわせて葬祭業者は業務を展開している。現在都市部では葬祭業者が知識を保持する存在として葬儀の主導権を握っている。しかし少なくとも大山町では、葬祭業者は地域の葬儀の主体となる人物の下で葬儀の役目を担うことが中心であり、葬儀に関する知識人としての立場は相対的には現時点で都市部のそれには及ばない。

また地域主体の葬儀が減少するにつれて、自宅葬から会館葬へ葬儀の形式は移りつつあるが、その移行度合いは葬祭業者の方針の違いにより地域ごとにバラつきがある。よって都市化の影響で葬制は均質的に変化するのではなく、〈地域の葬祭業者の論理〉という要因がその変化を多様なものになっている側面がある。

第6章 考察

本調査から、研究テーマである「地域の葬制は地域共同体が都市化の影響を受動的に受けることで均質的に変化しているのではなく、地域独自の論理により変容している」ということを検証する。まず下木料の場合、葬制は伝統的な形式が失われつつあり、その変容は近代化による合理化の流れと農村社会の崩壊が要因と考えていいだろう。このような変容の流れに対して住民の多くはそれを受動的に受け入れるのみで、地域共同体が主体的に独自の葬儀の形式を選択しているわけではない。しかし住民の多くが故人を地域で弔いと思っていることから、葬制の都市化、近代化は住民の意識までを変えてはいないと言うことができる。

上坪の場合、地域は依然として葬儀の主体であり、地域共同体は自立的に機能している。そのことは近隣の地域が都市化、近代化の影響を受けた簡素な葬儀に移行しつつある中で、今なお昔ながらの伝統的な葬儀を行っていることから明らかである。また上坪の地域共同体が自立的に機能している背景には「葬式は他のもんにはまかせられん」という強い住民意識がある。この意識は外部の影響を寄せ付けない排他的な一面があると同時に、住民を地域に帰属させる拘束力として作用し、昔ながらの葬儀を行うことを可能にしている。

以上のことから、大山町旧名和町地区という人口7,000人余りの狭い範囲を見ただけでも、葬制の変容は地域によって様々であることがわかる。下木料のように都市化、近代化の影響を大きく受ける地域もあれば、上坪のように外部からの影響にとらわれず、地域独自の論理で伝統的な葬制を残す選択をしている地域もある。よってこのように変容の度合いが異なる地域が狭い範囲に同時に存在するという事実は、「地域の葬制の変容は都市化、近代化の影響を受け均質的に葬制を変容させている」という説を否定する論拠となる。

また大山町では、葬祭業者は葬制の都市化・近代化を加速させる要因ともなっている一方で、伝統的な葬制を維持する役割を担っている面もある。自宅葬と会館葬の比率が地域によって異なる点はその例であり、各々の葬祭業者の独自の論理が地域の葬制に影響を与えている。よって地域独自の論理だけではなく、地域の葬祭業者の論理という要因も加わり地域の葬制は多様なものとなっている。

おわりに

今回の調査で同じ町内でも地域によって伝統的な葬制が維持されている地域と、消滅しつつある地域が存在することが明らかになった。また地域による会館葬と自宅葬の比率の違いから、地域の葬祭業者の独自の論理も葬制の変化を多様なものに行っている要因であるということがわかった。

葬式には多くの人が集まる。家族、兄弟、遠方の親戚、故人の知り合い、葬祭業者、お坊さんと様々である。このような「人の死は人を集める」ということに単純な興味を抱いて卒業論文のテーマも葬式に関するものにした。また来年から地元に戻らず県外で就職する筆者としては、テーマを地元に関連させることで自分の故郷を改めて詳しく再認識したいという思いもあった。

このようにして出てきたテーマが「葬制の変容からみる地域社会」である。調査方法は地元の方々を対象にしたインタビューが中心となったが、筆者の地元の葬儀文化に関する予備知識が不足していたためその内容は消化不良の残るものとなった。しかしインタビューを引き受けてくださった地域の方々が、どなたも快く話をしてくださったことでその失態は補えたように思う。

そのように紆余曲折を経ながらもなんとか終わることができた今回の調査で、調査結果以外にも自分の知らなかった多くの地域の一面を知ることができた。亡くなった筆者の親戚がインタビューをした家と家族同然のように仲良くしていたという話、また昨年筆者の姉が結婚式を挙げた際、自宅で伝統的な嫁入りの儀式を行ったところ、「花嫁姿を見たのは何年ぶりだろうか」と涙を浮かべて喜んでくださった部落の方がいたという話など、自分の思っている以上に地域は共に生きているということを知ることとなった。またインタビューをした上坪の二人がお互いに冗談で言った「俺が死んだらこいつが葬儀をしてくれる」という発言も、そのことを強く印象づけるものだった。一方で下木料の葬制が地域主体でなくなりつつあるという調査結果が出たように、「部落の人々が集まる機会がなくなってさみしい」と嘆く方もいて、地域共同体の力も薄まりつつあることを強く実感した。

葬制は地域が独自の論理により変容させていると今回の調査で改めて確認された。地域社会は必ずしも都市化、近代化の影響を直接受け均質に変容するわけではない。今回は葬制を切り口として研究を行ったが、他の民俗習慣ではどのような結果が出るだろうか。またの機会に調べてみたいと思う。

最後に今回この卒業論文を書くに当たって、下木料のみなさん、上坪のみなさん、三井葬祭のみなさん、大山町図書館のみなさんにお世話になりました。ここに感謝の意を示します。本当にありがとうございました。

[参考文献]

- 内堀基光, 1987, 「葬制」 石川栄吉ほか編『文化人類学事典』弘文堂, 429-430.
- 川上延彦, 2009, 『伯耆に生きて』有限会社ワン・ライン.
- 島田裕己, 2010, 『葬式は、要らない』幻冬舎新書.
- 嶋根克己, 2001, 「近代化と葬儀の変化」 副田義也編『死の社会学』岩波書店.
- 新谷尚紀, 2006, 「葬儀」 福田アジオほか編『精選日本民俗辞典』吉川弘文館.
- 福澤庄司, 2002, 「葬儀社の進出と葬儀の変容 - 松本市を事例として - 」『葬儀と墓の現在 - 民俗の変容 - 』国立歴史民俗博物館.
- 武田正, 2002, 「東北地方の葬送儀礼 - 山形県米沢地方を中心として - 」『葬儀と墓の現在 - 民俗の変容 - 』国立歴史民俗博物館.
- 中山町誌編集委員会, 2009, 『新修中山町誌 - 下巻 - 』中山町誌編集委員会編.
- 山田慎也, 2007, 『現代日本の死と葬儀』東京大学出版会.

[参考 URL]

- 産経新聞社, 2010, 「「宗教介入だ」 仏教界困った イオンの葬儀サービスが「お布施」に目安」, 産経ニュース, (2010 年 10 月 3 日 : [http:// sankei.jp.msn.com/life/trend/100702/trd1007020055000-n1.htm](http://sankei.jp.msn.com/life/trend/100702/trd1007020055000-n1.htm)).
- 厚生労働省, 2010, 「人口動態統計 2010 年」, 厚生労働省ホームページ, (2010 年 10 月 3 日 : [http:// www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/jinkou/suikai09/index.html](http://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/jinkou/suikai09/index.html)).
- 大山町, 2010, 「大山町のあらまし」, 鳥取県大山町行政ホームページ, (2010 年 10 月 3 日 : [http:// www.daisen.jp/](http://www.daisen.jp/)).